

『Object&space

—モノと空間の関係性の考察とそこから生まれる方法論の展開—

極めて個人的だと思われる経験が社会的な規模での共有できる経験であったりすることがある。例えば、住み慣れた部屋から引っ越し際に、荷物を出してしまったら途端に他人の部屋に見えてしまい、新しい部屋に荷物を入れたら途端に自分の部屋のように感じ始める。また、長期間滞在するホテルの客室や入院を余儀なくされた病室に荷物を持ち込む。必要な服や本だけでなく、花を生けたり、写真を並べたりして、そこを居心地の良いようにドレスアップしていく。こういった感覚や行為は、モノによって作られる空間の存在を証明している。また、多くの人は家を購入するまでの間、賃貸のアパートやマンションに暮らす。建築の善し悪しよりも経済性や利便性が優先されて住む場所は決定される。その中で毎日心地よく生活できるように家具やカーテンを揃え、ある程度快適に生活は営まれる。家を購入する場合でさえ、このことが言えてしまうこともある。今日、多くの建築では空間が作られた後にモノが添えられ、空間を補完するといった関係性が見て取れる。モノやモノの配置のみで空間が成立してしまった時、建築はどのようなスタンスを持ち得るのだろうか。この現代的な問題に対する応えが、モノと空間の関係性を考察することによって得られる。本研究は以上のようなことを発端に、実験的で概念的な作品、自然発生的な状況、関係性を捉えている作品やそういった観点を抽出することができる作品等の事例を探り、そこから幾つかの方法論を導き出すことを目的としたものである。研究と制作を交互に繰り返す進め方によって生まれた一連の作品は、モノと空間の関係性という一貫した研究主題に応えたものであるが、アプローチによって全く異なる結果が生まれている。本研究の詳しい解説に代えて、本研究を反映した作品を幾つか掲載する。空間を考察することからモノの形態を導きだした作品、モノと空間の境界を曖昧にすることを試みた作品、モノの機能や特性を拡張することで建築へと転じた作品など、結果の多様性は研究の持続性を示唆するものと考えている。その中でも、本研究を最も明確に体現した『lampshade cafe』を出展作品として提示する。

『hanger-shaped buckle belt』(写真 a, b)

共同制作=多摩美術大学大学院 五味翔太

バックルをハンガーのような形としたベルト。色々なところに掛けられる、収納から考えたベルトの形。バックルの一部を切り欠いた形状にする為に、ピンの収まる軸に段を設けている。これにより、革部分が抜け落ちない構造となっている。

『kumonosu』(写真 c, d)

蜘蛛の巣を模したホームアクセサリ。部屋の隅やデスク前、キッチン、ベッド周りなどでハンギングラックとして使用できる。餌や葉が集められた蜘蛛の巣のように、部屋の中の細々したものが集まる場所になる。ポリプロピレンをシート状にしたものを使用し、平面で購入したものを自由な形に起こすことができる。蝶の形のメモクリップ付き。



a



b



c



d



e



f



g

『wall paper book cover』(写真 e)

本の多い部屋では、背表紙のデザインがそのまま部屋の壁になる訳だが、一冊ごとに異なるデザインがざわついた印象を与えてしまう。このブックカバーは、本が増えていっても出来るだけ存在感が希薄になるように壁紙のようなテクスチャーになっている。部屋をざわつかせる物が増えるのではなく、部屋を静めてくれる壁が出来上がっていく仕組みで、気兼ねなく蔵書を増やしていける。近くで見るとタイトルが確認できる程度の薄さで、探す際に手間取ることもない。



h

『wall paper furniture』(写真 f)

静かな風景を目指して、家具の形状を整理したらアイコンのような家具が生まれた。はっきりとした線は、空間に対して逆に強く映ってしまう。この家具シリーズは、室内の仕上げに用いられる壁紙を施すことで、より静かな存在の仕方を志向している。壁紙は微かに凹凸のあるものを使用し、触り心地も良いものとなっている。また、テーブルや椅子などの汚れが付きやすいものはプラスチックコーティングを施している。



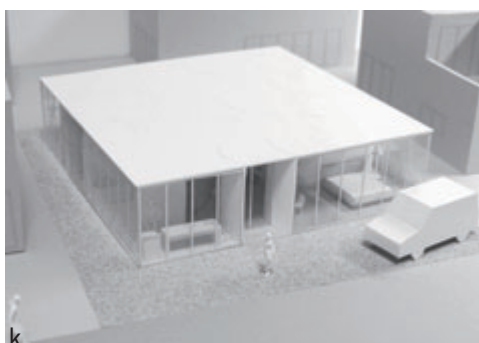
i

『Spatial object』(写真 g, h, i, j)

モノと空間を分けて捉えられないような状況を生成することで、少し異なる角度から目の前の風景を捉えられるのではないかと考えた。壁や床との境界が曖昧なモノは、通常のモノよりもその周辺の空間を色濃く描き出す。それらユニットを組み合わせることで、より空間性を持つようになる。まず、家具見本市の会場という仮設的で実験的なプロセスを踏んで、より具体的な建築である住宅に至った。前者では、空間的なモノという特性から商品である椅子やテーブルに余計なイメージを付加することなく、使われる情景を説明できる。後者では、例えばカーペット敷きの床が立ち上がり、ソファとなることでマテリアルを通じてより密にモノと空間を結び付けている。また、壁や床から切り出され、立ち現れるということから、上下階、隣り合う部屋同士の関係性も生まれてくる。パーツの集積としての建築ではなく、数枚の壁や床から切り出されることでモノが立ち現れ、同時に開口部が生み出され、空間が作られていく建築となっている。この方法は他にも駅やバス停留所などにも有効である。単に固定された家具としての位置付けではなく、壁や屋根といった建築を形成する要素を同時に作り出すことができる為、視覚的にも非常に整理された空間を作ることができる。



j



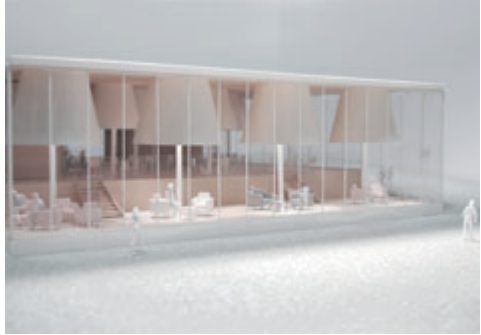
k

『Partition house』(写真 k, l)

パーティションを構造体とし、またその特性をプランニングに反映させることでモノと空間を近づけている。独立性を確保しながらもおおらかにつながった構成は、そこに住む人々に多様な関係性を提供している。また、湾曲した壁はモノを置いた時に空間への突出をやわらげる効果も持っており、多くのモノに囲まれた現状に応える結果となっている。その為、ギャラリー、ショップ、オフィスなどの用途にも応用することができる。

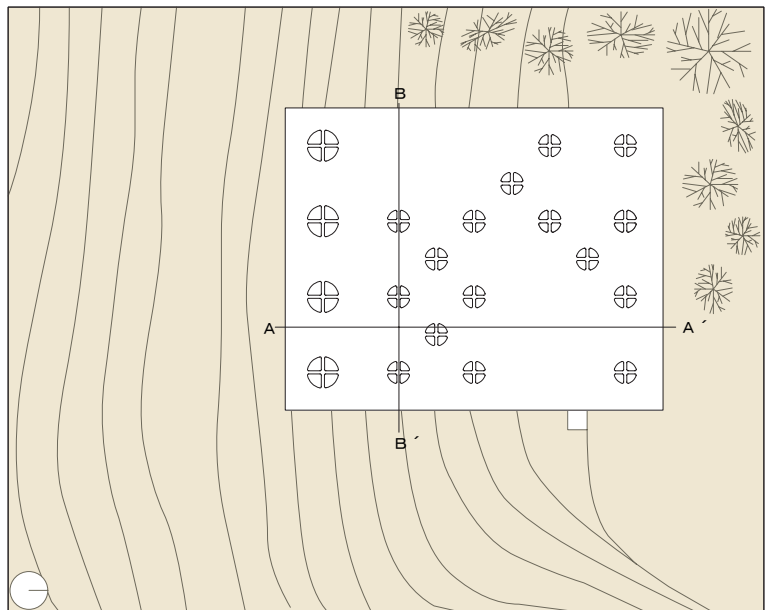


l

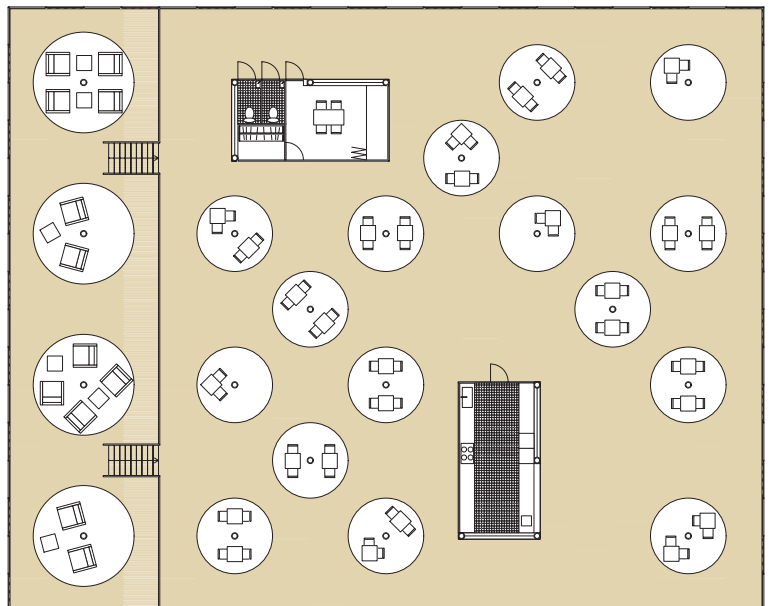


『lampshade cafe』

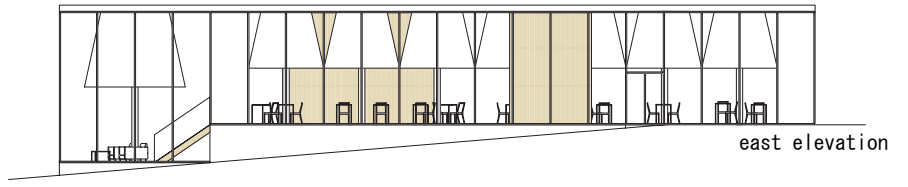
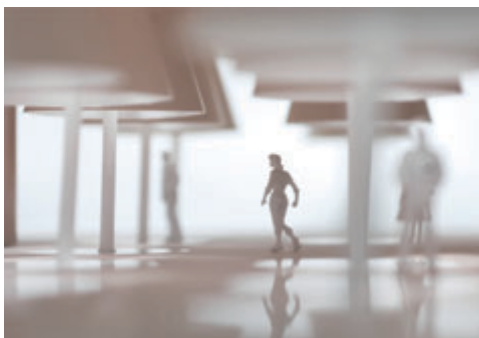
多くの建築では、空間が作られた後にモノが添えられて、空間を補完するといった関係性が見て取れる。モノと空間が無関係に存在する状況に対して、この作品ではモノの機能や特性を拡張し、先行して考えることによって、空間を構成する要素のプライオリティを崩している。多くのレストランやカフェでは、客席にランプシェードが下げられている。光の下に人々が集うこのポエティックな状況から、ランプシェードをカフェのキャラクターとして抽出することができる。このカフェは、大型のランプシェードが構造体となっており、ランプシェード内はトップライトになっている。これにより、構造体、開口部、モノといった、それぞれがそれぞれで存在していた状況が整理され、説明的で透明性の高い空間を生成することができる。また、いくつかのランプシェードは、雨樋や配管として機能する鋼管（フェイク柱）となっており、これにより整然としたグリッドを崩している。乱立したランプシェードが木漏れ日とも異なる光を落とす、人工的な森のような構成となるように意識している。



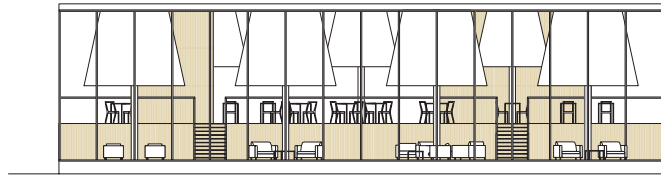
site
scale 1/600



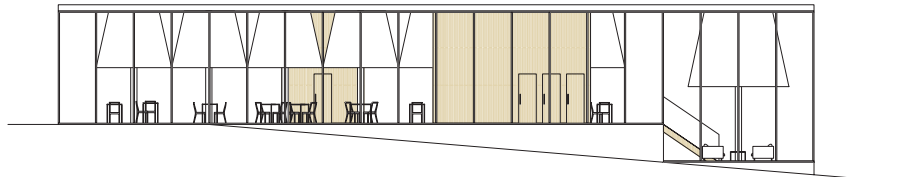
plan
scale 1/300



east elevation



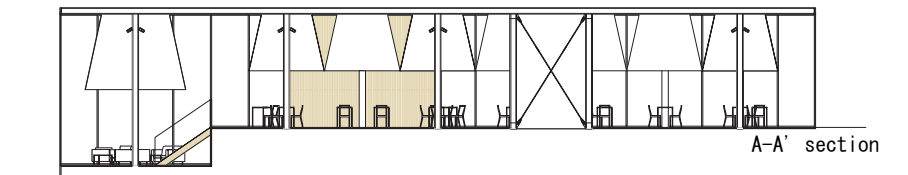
south elevation



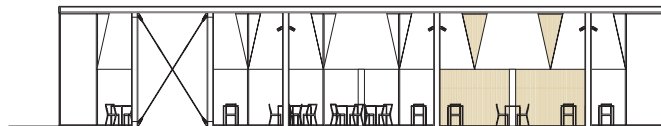
west elevation



north elevation



A-A' section



B-B' section
scale 1/300

